

蒸呂風

壘河<sup>レホ</sup>（人家二百餘又十一里を進みて三個井（人家五戸）に出て更に十里にして大石頭<sup>タイシト</sup>（人家四戸）に着す。是より天山を越へて南路に合すと。

長安出發以來、一たびも入浴したる事なし。否入浴すべき機會なきと、入浴の場なきとに因る。唯々日々數回、水或は湯にて、能く身體を拭ひしのみ。幸に當地には纏頭回民の營む浴場あるが故に一日之に入浴を試みたり。室内衣を脱して浴室に投すれば、蒸氣人を襲ふて晝尙は暗く、一穗の燈火、在れども無きが如し、始めて知る是れ蒸風呂なるを。室は方三尺内外、内に浴槽を置く。其の暗淡たる爲め明視する能はざるも餘りに不潔ならざるが如し。殊に其の設備宜しきを得たるは平坐頭上、一個の栓ありて、之を捻れば温湯條を成して迸出し、全身を自由に洗ひ去り得べきに在り。予は其の慣れざるに因り蒸氣に堪へず、居る約五六分、勿々室を出で、蘇生の想あり。一浴銀二錢、其の設備上より云へば價格は寧ろ廉なるを覺ゆ。

予の當地に入るや、一日敬意を表する爲め、露國領事クロトコフ氏を其の官衙に訪問す。領事予を一瞥して、突如問ふて曰く、『貴官の旅行は日本の爲めか、將た清

露國領事  
と語る